

木曾谷模型の文化財指定と活用

木曾町教育委員会 生涯学習課
学芸員 伊藤幸穂

1. はじめに

筆者は木曾町教育委員会生涯学習課に学芸員として勤務し¹、木曾町内に点在する資料館・郷土館等の歴史・文化施設の展示業務などを担当している。筆者の担当箇所は現在、非常に広範囲にわたっており、研究調査については、必要性の高いものから行っている。それらの中でも、最も近年に整備された施設である御料館（旧帝室林野局木曾支局庁舎）（写真1）には、準備段階から関わっており、平成26年（2014）の開館後も、企画展や講演会を担当し、日常的に管理・運営業務の補助も行っている。

そこで、同館に常設展示されている「木曾谷模型」（以下、略記である「模型」も併用）が令和5年（2023）1月19日付で木曾町有形文化財（歴史資料）となったことを学芸員の立場から報告し、現在までの活用状況と今後の展望を紹介する。ちなみに筆者は通常、文化財指定業務は担当外ではある。しかし、今回、業務の一部を補助していることから、文化財行政の担当職員から指定措置について聞き取り記述した。



写真1 旧帝室林野局木曾支局庁舎 外観

なお既に本紀要のバックナンバー（第1号～3号）²に模型についての論考が掲載されているため、重複部分が出るが必要な言及を行う。

2. 木曾谷模型の移転と文化財指定への道のり

（1）模型移転の経緯

最初に「木曾谷模型」について簡潔に説明をすると、明治14年（1881）の第2回内国勸業博覧会の農業部門の参考品として展示するために、当時の内務省山林局長が木曾出張所とやり取りするなかで裁可された³、木曾ヒノキ製の巨大な木曾谷全域の立体的な模型である。模型はその後、宮内省へと所管が引き継がれ、明治中期には、伊勢神宮にある神宮徴古館農業館へと移管された。

製作したのは現・木曾町福島に住んでいた児野嘉左衛門と山林局の出張所職員達である。この約5畳分の面積を持つ巨大な模型が、製作地である木曾町福島に「里帰り」するのは、明治・大正・昭和期を越えてはるか110年先の平成2年（1990）のことになる。

その年、林野庁長野営林局福島営林署職員や地元大工等によって、試行錯誤の上に修復された模型は、翌平成3年(1991)2月2日に木曾町福島にある福島営林署の1階で披露され⁴、多くの報道陣も取材に訪れる⁵など大変な関心と呼んだ(写真2。詳細は文末脚注4参照)。しかし、設置後5年程で同署が閉鎖されることとなったため、営林署関係者等の働きかけにより、木曾福島町に移管され、同町城山にある木曾福島郷土館に移転設置された。この時期に、床面に直置きではなく、台座が作られたようだ(写真3)。そして、約14年間展示された。

筆者と模型との関わりについて、最も古い記憶から辿ると、木曾路美術館学芸員だった平成14年(2002)から数年の間に木曾福島郷土館で2度程見学したのが最初である。しかし、その際には異様ともいえる大きさは視認しても、どこことなく神社に奉納されていたと思わせる古い印象もあり、それ以上資料の歴史や背景へ注目することもなかった。

同館では、模型の周囲に幅2cm程の三色玉砂利が敷き詰めてあり、模型の表面に割合に鮮やかな色のペンキ塗装が施されているので、星霜を経ている資料のようにも見えなかったせいかもしれない。または筆者の観察力が及ばなかったせいかもしれない。



写真3 平成21年「木曾谷模型」木曾福島郷土館2階(木曾山林高等学校資料室へ移転するため解体中)



写真2 長野営林局「ながの広報」1面(110年ぶりに里帰りのした「木曾谷模型」) 第1067号.平成3年2月16日発行
提供：中部森林管理局 総務企画部総務課

いずれにせよ、同館は福島宿の近世資料や民俗資料を展示するための施設であり、模型に注目が集まる機会も減っていたようだ。当然ながら、学芸員による調査等も、行われていなかった。

しかし、そのような状況のなか、「里帰り」に関わった人々などから、模型をより公開に適した場所に移転し、多くの観覧者に見てもらおうとする計画が持ち上が

り、平成21年(2009)に現在の木曾山林資料館(当時は木曾山林高等学校資料室)に移動することになった(写真3)。同校の同窓会である蘇門会へ貸与する形での移設だった。

この時に模型の組立と解体に立ち会った木曾山林資料館学芸員の山口登氏は、「模型の内部構造を観察することができたことがきっかけで、多くの謎を解明したいと考えたと」述べている⁶。

(2) 山口登学芸員の研究と先行研究について

木曾山林資料館学芸員であり、旧木曾山林高等学校林業科で長年にわたり教鞭を執られてきた山口登氏は、林業立県である本県でも珍しい林学が専門の学芸員である。

そこで、模型について林業資料という観点と、明治初期としては大変珍しいジオラマ(立体地形模型)がなぜ製作されたという観点から、時代背景や沿革を明らかにするため、約1年間かけて調査を行った。そして、当時、木曾青峰高校生徒だった椛本杏子氏の模型縮尺や精度を測定した課題研究を含む、それらの研究結果と図表・写真などを大型の展示パネルに論考としてまとめ、館内で模型の周囲に展示した。また、「児野嘉左衛門制作『木曾谷模型』について」(表1参照)と題する研究報告(未刊行)としてまとめ、平成22年(2010)に木曾町教育委員会へ提出された⁷。

表1 木曾谷模型に関する論文・寄稿記事等一覧

発表年月	著者	題目	掲載媒体	備考
平成18年(2006)3月	田原昇	近代木曾林業と第二回内国勸業博覧会	徳川林政史研究所研究紀要第40号	
平成19年(2007)3月	安藤茂良	近世木曾材の伐木・運材の資料について	徳川林政史研究所研究紀要第41号	
平成22年(2010)	山口登	木曾町教育委員会所蔵/御料館展示 児野嘉左衛門制作『木曾谷模型』について	未刊行	木曾町文化財保護審議委員会へ提出
平成23年(2011)	高倉章	手記 木曾谷鳥瞰模型百余年の旅		木曾山林資料館で展示公開にあたり寄稿
令和2年(2020)3月	山口登	木曾谷模型の平面図作成について	木曾山林資料館研究紀要第1号	
令和2年(2020)6月	伊藤幸徳	明治の巨大ジオラマ「木曾谷模型」2020年6月5日	松本市民タイムス連載企画「ミュージアムから収蔵品紹介」	
令和3年(2021)3月	山口登	木曾谷模型の里帰り	木曾山林資料館ホームページ「歴史の中のエピソード」(web公開)	
令和3年(2021)3月	山口登	明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか	木曾山林資料館研究紀要第2号	
令和4年(2022)3月	山口登	明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか(同一部訂正)	木曾山林資料館研究紀要第3号	
令和4年(2022)9月	山口登	木曾町有形文化財指定候補物件 調査報告書—木曾谷模型—		木曾町文化財保護審議委員会へ提出

山口氏は、文献調査によって、先行研究である平成18年(2006)年の田原昇氏の「近代木曾林業と第二回内国勸業博覧会」と平成19年(2007)の安藤茂良氏の「近世木曾材の伐木・運材の史料について」(いずれも『徳川林政史研究所紀要』)と巡り合い、製作当時の行政文書と実物の模型とを一致させて考察することが可能となった⁸ことで、より多くの謎を追跡することが可能となった。

その研究内容を要約すると、①模型の正確な計測を行い、製作当時の地図と模型外周を重ね合わせた平面図を完成させ、測量による計測結果から水平方向と垂直方向の縮尺を算出して、ジオラマ模型としての情報を整理したこと。②約140年にわたる模型の履歴をまとめ、一覧に示したこと。③製作背景となった官林時

代の木曾の林野行政と模型を併せて考察したこと。④類例について調べ、近世の山林模型との比較検討を行ったこと。などを挙げられるだろう（山口氏の論考は本紀要1号から3号に掲載されているので、ぜひ全文をご覧ください）。

紀要2号論考のあとがきで山口氏は「御料館を訪れて模型を実際に見ることでその迫力を実体験して欲しい」と記し、「模型の今後の研究の進展にも期待を寄せる」とも結んでいる。氏に続く林政史・林学研究者の研究が待たれるだろう。

以上の通り模型の移転の経緯を振り返ると「木曾谷模型」は、木曾福島郷土館から旧木曾山林高校の空き教室を活用した資料館へ貸与、移設展示されることがきっかけとなり、本格的な研究と活用が始まっている。また、重要な先行研究についても、筆者を含め、地元関係者の間で共有することができた。平成26年(2014)には、後述するように模型は再び木曾町の管理する施設(御料館)へと返却され、現在に至っているが、きっかけを作った多くの町民や旧福島営林署関係者、蘇門会などの尽力があったという経緯は、後世へ伝えてゆく必要があると感じている。

3. 木曾町教育委員会の取り組みと指定措置

この章では、模型に関する木曾町教育委員会での取り組みについて述べ、次に木曾町有形文化財指定について報告する。

御料館は平成26年(2014)年7月19日に一般公開を開始した文化施設である。昭和2年(1927)建築の現庁舎は、御料林(後の国有林)を管理するため、戦後には長野営林局、福島営林署として使用された。平成22年(2010)に木曾町が林野庁から有償で取得して以後には、平成24年(2012)に木曾町有形文化財(建造物)に指定し、約2年をかけて建設当時の図面をもとに復元改修工事を行い、木曾谷の森林文化の発信や観光交流等で利活用する施設として開館することとなった。

そこで、木曾町と木曾町教育委員会では、模型が伊勢神宮から里帰りしてから約5年間、旧福島営林署時代には庁舎に展示されていた縁もあり、模型を貴重な展示品として庁舎内で一般公開し、活用する方針⁹で準備を進めた。

奇しくも、「里帰り」した庁舎の、今度は2階部分に移設されることになったのである。

筆者は、御料館の開館準備中に、教育委員会の臨時職員として模型の解体設置の現場に立ち会うことができた。すると表面から想像できなかつたのだが、無垢材を刻み、加工し、全体を組み上げている技巧が隠れていたことが分かった。部品の断面はまさに星霜を経た「古材」であり、素材の魅力にも感銘を受けた。この時が模型の価値を広めてゆかねばという自覚を持った瞬間である。模型は、この移転から現在まで、2階展示室内に常設展示されている。

下記に木曾町教育委員会がこれまで不定期で行ってきた模型の整備などについてハード面(設備等)とソフト面(調査・研究等)に分けて列記する。

(1)「木曾谷模型」を展示する際に行ったハード面(設備等の変更・整備)

①開館前の庁舎2階への移転に際し、台座をかさ上げするため、下部土台となる

部材とキャスターを取付けた。

これにより、以前よりさらに18 cm高い位置で鑑賞できるように整備した。理由は、過去の展示がやや低かったことと、床に直置きするとレイアウト変更をする場合に作業が難しくなるため、教育委員会の判断で取り付けた。筆者のこれまで経験から考えると、展示物に対し視線が低い場合は親しみを持つことが多く、逆に高い場合は対象に品位を感じるが多い。今回の整備により長い歴史を経てきた貴重な資料であることが、より印象付けられることになったのではないかと考えている。

②模型を、実際の方位に合わせて設置し、御料館のある位置に現在地を表示した。

移転作業中に模型の設置方向（東西南北の向き）を決めることになり、当時の木曾町教育委員会担当係長古畑浩二氏と筆者で協議し、方位磁石を使用して実際の方角と同じ向きに模型を設置した。その後、模型上に現在地（庁舎位置）の表示も取り付けたが、文化財指定に合わせ令和5年1月に取り外した。

③平成26年（2014）6月移転時に模型の周囲にあった玉砂利を取り外した。

移転に際し台座の上に敷いていた三色玉砂利を除去し、玉砂利の置かれていた床面にベージュのフェルトを敷いた。

当時、関係者のなかには変更には慎重な意見もあったが、模型そのものがより映えるようにするため、材質の異なる素材は外した方が見やすいと筆者が判断した。木曾山全体の縮尺版である模型であるので、主役である木曾ヒノキの存在感をより前面に押し出すことができたと考えている。

（2）「木曾谷模型」に関する調査研究などソフト面での取り組み

①メイン展示品として位置づけて広報などでPR。

開館以後、御料館のメインの展示として位置付け、新聞紙上での所蔵品紹介¹⁰や情報誌等への発信、観光ツアーにおいて、木曾地域全体の概要を説明するために活用するなど、様々PR活動を行っている。令和5年（2023）1月25日には、インバウンド担当旅行業者を招聘したツアーにおいて、御料館に訪日旅行担当の観光関係者や木曾地域の観光業者等18名が訪れ、赤沢自然休養林や木曾路11宿の位置など、模型を活用して知ることによって木曾谷の魅力を発見した。



写真4 令和2年11月木曾学講座 御料館2階講師の山口登氏（右端）による模型の解説（模型全体と参加者が写真に入るように魚眼レンズを使用）

②教育委員会生涯学習課が主催する地元学講座である「木曾学講座」の開催。

令和2年（2020）から2年間にわたり、木曾山林資料館の山口登氏に講師を依

頼し、「木曾の林業の歴史 I・II」(江戸時代・明治時代)を御料館等で開催した。特に令和3年(2021)11月11日には御料館2階会議室で「明治時代の木曾山林業」と題し、模型について実物を見ながら解説頂き、多くの町民らが聴講した(写真4)。

③過去の解説看板の設置。

平成2年(1990)に福島営林署が作製した看板と平成7年(1995)に木曾福島町教育委員会が作製して模型とともに設置していた木製看板を模型の周囲に設置し、平成22年(2010)に木曾山林資料館で掲示されていた解説パネル4枚も周囲に掲出した。

④模型に関わる戦前の絵葉書の寄贈を受け、常設展示で展示。

令和3年(2021)に御料館で開催した企画展「日本遺産木曾路のすがた」に出品された大正10年(1921)の神宮徴古館農業館発行の「木曾山模型絵葉書」が企画展終了後に、所有者の中畑孝史氏から御料館へ寄贈された。同絵葉書は戦前における唯一の模型の写真となっており、山林境界や林野の名称などが記載された模型の様子を表す貴重な資料となっている。

⑤木曾町教育委員会職員による関係者への聞き取り調査の実施。

令和3年(2021)10月5日に上松町在住の高倉章氏(平成2年[1990]の里帰りに関わった当事者の一人で元・蘇門会会長)からの連絡を受け、教育委員会の牛丸景太主査と筆者が伊勢神宮から木曾町へ里帰りした状況について聞き取り調査を行い、里帰りするまでのいきさつや、関係者としての想いを聴取することができた。

令和5年(2023)2月16日に、牛丸主査と筆者で木曾町福島「木曾路の宿いわや」にて「褒状」の実見および、模型作者である児野嘉左衛門について調査を行った。すると、同旅館内の一室に設置されている衝立が、嘉左衛門が描いた絵画4点を貼り交ぜて製作されたものであることが判明した(写真5)。子孫である児野周代氏によると、嘉左衛門は書画に長けた人物であり、現在知られている木彫の「自刻像」(いわや旅館蔵)以外にも絵画や彫刻の才能を示す作品が残されている可能性もあるという。4点の絵を見ると、大和絵のような伝統的な日本の絵画を学んだのではないかと思われ、優雅さを感じる作品だった。また、子息である児野益典も、神社に奉納する絵馬など地域に残る絵画を残しているという情報も得た。



写真5 児野嘉左衛門が描いた絵画
(衝立貼交) 木曾路の宿いわや所蔵

以上の通り、徳川林政史研究所研究員、木曾山林資料館学芸員、木曾町教育委員会の調査により、模型の詳細が判明した。戦後の一時期など、未詳な期間があ

製作経過にも関わった可能性もあるだろう。また、模型の発注時に山林局長だった桜井勉（1843－1931）（写真8）は、山林局創始の前後に官林の直営伐採事業など、局務に勉励した一人として緒方の名前を挙げている¹⁹。

桜井は、前職の内務省地理局長の頃より、官林の直轄管理への移行など様々な施策を推進した高等官だが、博覧会の準備中だった明治13年（1880）3月に、官林の直営伐採事業の失敗を理由に更迭²⁰されている。緒方も内部の派閥争いに巻き込まれる形²¹で同年9月に局を去っている。しかし模型の出品作業は粛々と進められたのだろう。そして、明治14年（1881）6月発行の褒状には緒方の名前は「審査官」として褒状に登場している。



写真7 田中芳男



写真8 桜井 勉

このように「木曾谷模型」とその「褒状」は、明治14年（1881）6月の木曾全山を立体的に現し、揺籃のただなかにあった日本の近代林業草創期と、短かった木曾の官林時代を今に伝える、貴重な歴史資料の一つであるといえる。重ねて、同年10月以降に官民で活発になってゆく皇室財産論の推移と、前後して提案される御料林創設案及びその議論過程²²を追ってゆく際の参考資料としても、重要ではないかと考えている。

また、審査部長として名を連ねる田中芳男は、明治24年（1891）に自身が建設等を一任された、三重県伊勢市の神宮徴古館農業館²³へと模型を下付させ、欠損部分に必要な修復と装飾などを施したとの同館の記録²⁴もあり、模型と最も関わった期間が長い実務官僚である。田中芳男と模型の関係についても今後さらに調査したい。

一方、日本近代美術史上での観点からいえば、明治20年（1887）代初め頃から「彫刻」の概念が一般化してくるという通説²⁵と模型の製作年代を照らし合わせてみると、「彫刻」の定義が曖昧で未分化だった明治13年

（1880）に製作された模型を、彫刻（木彫）作品として位置付けることは難しいと考える。これまでに明らかにされた、模型製作段階での内務省山林局と木曾出張所とのやりとりを記録した行政文書²⁶には「彫刻人」



写真9
第二回内国勸業博覧会（明治14年）揚州周延画（個人蔵）

「彫刻費」「彫刻」という用語が何度も使用されているのだが、第2回内国勸業博覧会（写真9）において、模型は第2区／美術（第1類 彫鏤）²⁷ではなく、第5区／農業部門の参考品として展示されている。したがって筆者としては、模型は児野嘉左衛門による彫刻作品ではなく、山林局が日本の博覧会において初めて出品した雛形（＝模型）²⁸の一つとして製作されたと説明したい。

ただし、日本の博物館成立の歴史をみると、博覧会会期中の明治14年（1811）4月に新設された農商務省が博覧会展示施設だった建物を使用して翌年開設した新しい「博物館」は、天産・農業山林・園芸・工芸・芸術・史伝・図書・兵器・教育・園芸の9部門の収集品があり、科学歴史及び美術に関する総合博物館²⁹だったという。この時はまだ、芸術や歴史、産業などの境界の概念も薄かったともいえるだろう。

また、そのような時代背景に関わりなく、模型は、そのスケールの大きさや、山容や溪谷を大胆に表現した木彫技術、木曾谷全体を一つの量塊としてとらえた創造性などが素晴らしく、現代の我々が模型に畏敬と感動を覚えることも事実である。当時の観衆も、現在の姿とは違う姿ではあるにせよ、嘉左衛門の「作品」を鑑賞し賞賛を送ったのではないかと想像する。その点を考慮に入れて調査研究をしたいと考えている。

今後の課題としては、今回の文化財指定に際し、物件の形式用語として使用している「ジオラマ」という呼称について、製作された当時はその概念も博物館等での展示装置も普及しておらず³⁰、日本では昭和初期頃からの博物館等での展示方法についての呼び名であるので、明治初期の時代背景と合わせて現在の用語の使用を整理してゆく必要がある。また、木曾地域に焦点を当てた研究課題として、模型の製作時期とも重なっている明治時代初期の官民有区分といった、木曾谷の村人と木曾山の関係などから、模型を考察することが必要だと考えている。

5. おわりに

御料館では、開館以後、御料林の歴史をテーマとした講演会や林業資料の企画展などを開催してきた。平成30年（2018）には日本森林学会は、近代林政史を物語る貴重な資料として、「旧帝室林野局木曾支局庁舎と収蔵資料群（「木曾谷模型」を含む）」が林業遺産に認定され、令和2年（2020）には文化庁の「日本遺産木曾路－木曾路は全て山の中 山を守り山に生きる－」の構成文化財として追加認定を受けた。

このような素晴らしい認定を受けることができた理由としては、開館時から庁舎内で「木曾谷模型」を展示品の核として活用できたことが大きかったと考えている。

今回の文化財指定を契機に、解説資料などを充実させ、時代背景についてさらに調査し、木曾の近代林政史上の重要な資料として次の世代へ適切に引き継げるよう努めたい。

そのためには、若年層から壮年期の人々を含め、幅広い世代に興味を持っていただく必要もある。今後は、林学・林政史のみならず、博物館学や日本美術史の論者などからの言及にも期待したい。

最後に、本稿を執筆するにあたり、ご教示賜った木曾山林資料館の山口登氏、スタッフの中畑孝史氏と、文化財指定業務のため議論を行ってきた木曾町教育委員会職員に感謝を申し上げる。

参考文献

- 長野県立歴史館（1997）『殖産興業と万国博覧会』
長野県立歴史館（2017）『田中芳夫-「虫捕御用」の明治維新』
伊藤寿朗監修（1991）『博物館基本文献集第16巻（棚橋源太郎著 博物館・美術史）』・大空社
手束平三郎（1987）『森のきた道-明治から昭和へ 日本林政史のドラマ-』・社団法人日本林業技術協会
日本林業技術協会（1962）『林業先人伝』・社団法人日本林業技術協会
寺尾辰之助（1931）『明治林業逸史』・大日本山林会
寺尾辰之助（1931）『明治林業逸史 続編』・大日本山林会
黒澤良（2013）『内務省の政治史 集権国家の変容』・藤原書店
東京国立博物館、毎日新聞社（2020）『東京国立博物館創立一五〇年記念 特別展 国宝 東京国立博物館のすべて』
佐藤道信（1996）『〈日本美術〉誕生 近代日本の「ことば」と戦略』・講談社選書メチエ
北澤憲昭（1989）『眼の神殿「美術」受容史ノート』・美術出版社
椎名仙卓（2005/普及版 2022）『日本博物館成立史-博覧会から博物館へ【普及版】』・株式会社雄山閣
淡交社編集部（2007）『日本彫刻の近代』・企画・監修 東京国立近代美術館ほか. 淡交社
佐々木克（2011）『NHK さかのぼり日本史④明治「官僚国家」への道』・NHK出版
木曾山林資料館（2020）木曾谷模型の平面図作成について. 木曾山林資料館研究紀要第1号
山口登（2021）明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか. 木曾山林資料館研究紀要第2号
田原昇（2006）近代木曾林業と第二回内国勸業博覧会. 徳川林政史研究所研究紀要第40号
福田淳（1997）御料林制度創設時の議論過程-明治9～15年-. 森林文化研究第18巻（1998）御料林創設時の議論過程-明治15～18年-. 同第19巻
友田清彦（1999）ウィーン万国博覧会と日本農業（上）. 東京農業大学農業経済学会→農業・農村経済学会 88号 pp. 25-38
石原あえか（2021）極東への林学ルート-近代日本におけるドイツ・オーストリア林学受容史-. ヨーロッパ研究 21, 5-17, 2021-12-1

別紙 令和4年度 木曾町教育委員会新規指定文化財 報道発表資料より抜粋
新規指定文化財「木曾谷模型」概要

- 種別 歴史資料
- 名称 木曾谷模型
- 員数 一基
- 構造及び形式 木製ジオラマ（立体模型）
- 概要

本物件は、明治14年（1881）3月から東京上野で開催された「第2回内国勸業博覧会」に出品するため、内務省山林局木曾出張所が主体となり、福島村の児野嘉左衛門（1809～1885）に発注して作らせた木製のジオラマ（立体模型）である。

木曾ヒノキの大径材をブロック状に加工し、表面に彫刻を施す手法で木曾地域（戦前の西筑摩郡全域）の地形を表現している。かつては39個の部材に分かれていた記録があるが、現在は29個を組み合わせて模型を構成している。

模型全体の面積は8.7㎡で、畳にして約5畳分に相当する。外縁長12m70cm、南北方向は5m20cm、東西方向は広いところで3m20cm、高さは一番高い御嶽山の頂上付近で67cm、となっている。縮尺は、水平方向は約1/15,000、垂直方向は約1/5,000という数値が得られているが、木曾谷北部が実際よりも狭く、南西部が広めに作られている。こうした特徴は、尾張藩と山村代官家による木曾山支配の過程で調製された地図についても同様の傾向が認められる。

制作を請け負った児野嘉左衛門は、御嶽を信仰・布教する行者・覚開としての一面をもち、義具とも名乗った。模型内部には、「信濃国西筑摩郡 福島村住 作人 児野嘉左衛門 七十三年」の墨書があり、模型制作に対する褒状が子孫の児野氏（木曾路の宿いわや）において保管されている。

●指定理由

（1）制作年、制作者、制作目的のほか、出品・移動歴等の来歴や、修復・保存にかかる取組が明らかであること。

（2）木曾山の近代林業黎明期を象徴する資料として評価できること。

（3）美術工芸品に匹敵する意匠性を備え、木曾ヒノキの耐久性や地元工人の優れた木材加工技術を現代に伝えている。

以上の3点から、木曾町はじめ木曾地域全体の林政史上重要な歴史資料であると認められる。



全景（1）木曾川下流域より撮影



全景（2）木曾谷北部より撮影

¹ 伊藤幸穂「私は木曾町の学芸員」『地域文化』八十二文化財団発行、2022年10月「地域の中の美術館」『美術館を語る』東京造形大学 2021年、風人社

² 木曾山林資料館「木曾谷模型の平面図作成について」『木曾山林資料館研究紀要1号』(pp.52-53)、山口登、前掲書2号「明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか」(pp.38-50)、前掲書3号「〈明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか〉の一部訂正」

³ 田原昇(2006)「近代木曾林業と第二回内国勲業博覧会」『徳川林政史研究紀要第40号』pp.150-151、山口登(2021)「明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか」『木曾山林資料館研究紀要第3号』pp.42-43を参照。

⁴ 記事原文を後学のために以下に全文転載する。なお資料の存在については中部森林管理局の井上日呂登氏からのご教示を得た。『110年ぶりに里帰りした「木曾谷模型」「木曾路はすべて山の中である」といわれた木曾谷を、明治十年ころ下信濃西筑摩郡福島駅(宿場)に住んでいた児野嘉左衛門氏(岩屋本店七代目)が、木曾ヒノキを使って彫刻し、これに御嶽山近辺に自生する苦(こけ)を使った樹木を植え、さらに人家、電信、橋梁なども配置した長さ約五¹/₂、幅約三¹/₂、高さ約七十¹/₂の大きさの模型にして、明治十四年の第二回内国勲業博覧会へ出品し入賞した。その後、宮内省御料局の所管を経て、明治二十五年一月から伊勢神宮の農業館に展示されていたが、このたび、同農業館を改築することになり、昨年六月に伊勢神宮から、縁の深い木曾谷で保管してほしいと、営林局に申し入れがあったので、検討した結果、木曾谷の中心地にある福島署で保管・展示することとなり、昨年九月に現品が三十九個に分割されて送られてきた。早速、組み立てたところ永い歳月によって、損傷や欠落した部分があり、福島署職員によって修復・復元し十二月末に完成したので、本年二月二日に「木曾谷模型」帰郷復元除幕式を福島署で行った。この日は、午前十一時から中村木曾福島町長を始め近隣の村長、伊勢神宮司廳、製作者の子孫など関係者三十人が出席して行われ、小池福島署長が、「百余年の間木曾谷をPRしてきてくれたもので、見れば見るほど素晴らしい模型で感心しています。復元も原形にほぼ忠実にでき、これからは郡民の皆さんに見てもらい往時を偲んでいただきたい」とのあいさつがあった。また、除幕式では署員の苦心作エンドレスタイラー方式による除幕が行われ、出席した一同は「さすが営林署ですね」と感心することしきり。午後からは、一般に公開されテレビや新聞で知ったという人たちで、会場は一杯になる程の盛況ぶり、そのほかにも、国有林の変遷、国有林の仕事などのパネル、職員の絵画、写真などが展示され非常に好評であった』

⁵ 朝日新聞、中日新聞、信濃毎日新聞などの少なくとも9社(山口登氏の調査による)。

⁶ 山口(2021)前掲紀要「明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか」第2号、p.38

⁷ 当時から「ゆくゆくは町の文化財に」と提言も頂いていたようだが実現するまでには12年程の期間が必要となった。

⁸ 山口(2021)前掲紀要、p.38より、田原昇氏は論考執筆段階では、「木曾谷模型」が現存していることを把握しておらず、徳川林政史研究所を通じて山口氏から伝え聞いた際には大変驚かれたという。

⁹ 当時の教育委員会担当係長だった古畑浩二氏と山口登氏からのご教示による。

¹⁰ 伊藤「ミュージアムから収蔵品紹介(明治の巨大ジオラマ「木曾谷模型」)2020年6月5日 松本市民タイムス

¹¹ 歴史資料の指定基準については「一 政治、経済、社会、文化、科学技術等我が国の歴史上の各分野における重要な事象に関する遺品のうち学術的価値の高いもの。(以下略) [昭和二十六年文化財保護委員会告示第2号]」と文化庁が定めている。

¹² 褒状には写真の4名に加え、模型の推告をした立場として、「審査副長 従四位勲四等 九鬼隆一」、「審査総長 正四位勲二等 佐野常民」の名が記されている。褒状の宛名は「農商務省山林局出品模造人 児野嘉左衛門」で、「内国勲業博覧会事務総裁二品勲一等 能久親王」の名で贈られている。

¹³ 写真7と8の肖像写真は、寺尾辰之助(1931)『明治林業逸史』巻頭より転載した。

¹⁴ 長野県立歴史館(2017)『田中芳男—「虫捕御用」の明治維新』p.41

¹⁵ 友田清彦(1999)「ウィーン万国博覧会と日本農業(上)」『農村研究』pp.28-30

¹⁶ 福田淳(1997)「御料林制度創設時の議論過程-明治9~15年-」森林文化研究第18巻 p.102 参照。建議の名称は「本省事業ノ目的ヲ定ムルノ議」(明治8年(1875))。福田によると、官林経営により収益が上げられることが理解されるようになり、長い議論過程の末、一部官林が宮内省へ移管され、皇室財産(御料林)となる。

¹⁷ 友田(1999)前掲書 p.29

¹⁸ 田原昇(2006)前掲書 p.148、山口登(2021年)前掲紀要を参照(明治13年6月30日に児野嘉左衛門に彫刻費350円が支払われている)。

¹⁹ 桜井勉(1931)「明治初期 内務省山林局創始の前後」『明治林業逸史』p.3

²⁰ 手束平三郎(1987)『森のきたみち』pp.24-28

²¹ 手束(1987)前掲書 p.30

²² 福田淳(1997)前掲書 pp.101-112、同(1998)「御料林創設時の議論過程-明治15~18年-」同第19巻 pp75-86を参照。

²³ 櫻井弘人(2017)「特別寄稿 近代日本の礎を築いた田中芳男」長野県立歴史館 前掲書 p.51

²⁴ 「神苑會農業館列品目録」(1900)第十四木竹類、p.385(2021年に高倉章氏よりの寄贈資料複写)より

²⁵ 佐藤道信(1995)『日本美術』誕生 近代日本の「ことば」と戦略』pp.51-52、古田亮(2007)「明治の彫刻」『日本彫刻の近代』p.8

²⁶ 国立公文書館つくば分館所蔵(旧中部森林管理局所蔵)「内国勲業博覧会関係文書」『明治13年7月 博覧会出品経費精算簿(山林局木曾出張所)』ほか

²⁷ 佐藤、前掲書 p.43

²⁸ 寺尾(1931)前掲書「博覧会及共進会」『明治林業逸史』p.827 には「…(第一回と)唯異なる所は山林局の参考品の出品であって、これは我國の斯かる催しに對する参考出品の先驅をなしたものであった。其の品名は、根拔器機雛形、木材桴送具雛形、鐵道架材雛形…(以下略)」とある。山林局のみならず、博覧会の参考品として初めて雛形(=模型)が考案されたのではないかと推測される(括弧内は筆者記述)。田原(2006)前掲書 p.139も参照。

²⁹ 東京国立博物館、毎日新聞社(2020)『東京国立博物館創立一五〇年記念 特別展 国宝 東京国立博物館のすべて』p.10

³⁰ 棚橋源太郎(1957)第五章 第一次世界大戦までの博物館・美術館。(伊藤寿朗監修(1991)『博物館基本文献集第16巻(棚橋源太郎著 博物館・美術史)』.大空社 pp.40-43収録)